



エンジニアとなるには

造性のある

創造の現場
の「ポイント」に見る構造デザイン

2015 TUE 7.14

主催 法政大学デザイン工学部
場所 法政大学市ヶ谷田町校舎T205

MASUBUCHI
MOTOI

HP:masubuchi.de

Access: JR市ヶ谷駅から徒歩10分
東京メトロ市ヶ谷駅から徒歩3分

Address: 〒162-0843
東京都新宿区市ヶ谷田町2-33

18:30-20:00 (OPEN 18:10)



※資料準備のため、ご参加希望の方は7月13日(月)17時までに
右記の電話またはメールアドレスにご連絡ください。

TEL:050-3136-4675

MAIL: E-mail:lab13.fujifuji@gmail.com

創造性のあるエンジニアとなるには

－ シュトゥットガルトスクールに見る構造デザインの一潮流 －

講演要旨：

これからの橋梁エンジニアが持つべき資質を聞かれれば、創造性をその第一に挙げたい。それこそが、橋梁設計の楽しさの本質である。そして、その楽しさは、ともすれば創造性をもった設計を税金の無駄遣いと叩かれるような昨今の風潮にもびくともしない、エンジニアの信念と誇りの源である。しかし、実際の設計においては、決められた納期や複雑な設計コードに従うことに労力の大半を費やし、そこに創造力を働かせることは難しい。ボートの櫂（かい）は左右で2本必要であるのに、我々は本来持つべき「創造性」という櫂（かい）を1本持たないまま、ボートを漕いでいるのではないか？ 将来私たちは創造性のあるエンジニアとなれるのか、またなるために必要なことは何だろうか。

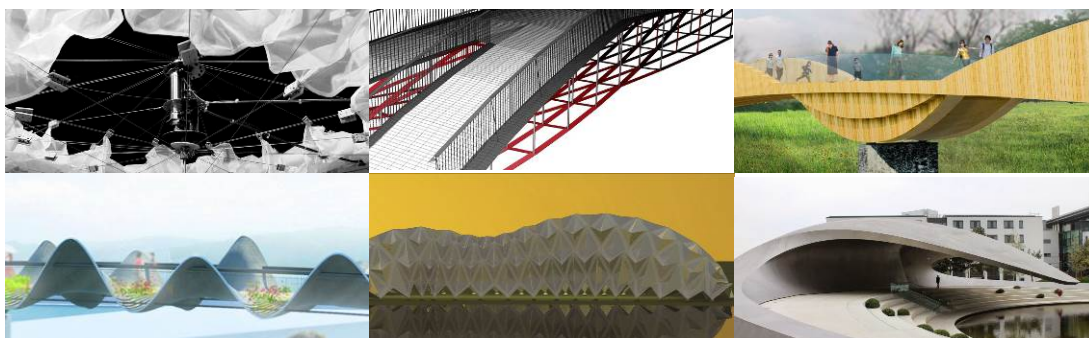
そもそも、創造性とは何だろうか？

写真は昨年ドイツのシュトゥットガルトで竣工された歩道橋である。一見奇抜に見える形や派手なカラーリングに顔を



しかめる方もいるかも知れない。しかし、この橋はアーキテクトやデザイナーが関与したものではなく、エンジニアだけで設計した橋である。例えば、死荷重に対して曲げモーメントが最大になる支間中央で桁高を最大にしているのは、構造的合理性から導き出された形態である。設計者は、「シュトゥットガルトスクール」出身のエンジニアである。

ドイツでは、このような創造力溢れるエンジニアが次々と出現し、魅力的な橋を生み出している。業界全体が賑やかで活気があるように感じられる。それでは、このような創造力溢れる橋梁エンジニアはどのようにして育ったのだろうか？ なぜドイツでは、それが上手く行っているのか？ 上述のシュトゥットガルトスクールを紐解きながら、この間について論じてみたい。



講演者：増淵 基 (MASUBUCHI Motoji)

1979年鎌倉生まれ。2003年北海道大学工学部土木工学科卒業。2005年スウェーデンのチャルマース工科大学にて修士号を取得後、2012年ベルリン工科大学にてマイク・シュライヒのもとで博士号取得。2011年より、schlaich bergemann und partnerやWerner Sobek Stuttgartにて建築構造設計に携わった後、現在Dr.Schutz Ingenieure（ドイツ）にて橋梁設計に従事。出版：マテリアライジング・デコーディング 情報と物質とそのあいだ, millegraph, 2014年, 共著/ 鉄道橋のデザインガイド: ドイツ鉄道の美の設計哲学, ドイツ鉄道(編), ヨルク・シュライヒ ほか(著), 鹿島出版会, 2013年, 翻訳/ 「Footbridges - 構造・デザイン・歴史」 鹿島出版会, 2011年, ウルズラ・パウズ、マイク・シュライヒ(著), 共訳 ジャーナル：シュライヒと日本の橋梁エンジニアに流れる通奏低音とは, 橋梁と基礎 47(9), 32-37, 2013-09, 建設図書/ 受け継がれゆくエンジニアの創造性--なぜヨーロッパでは魅力的な歩道橋が生まれ続けているのか, 橋梁と基礎 45(5), 28-31, 3, 2011-05, 建設図書 など HP:masubuchi.de